平成25年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報6

- 国庫補助事業に伴う発掘調査 -

平成 26年(2014年) 3月 茨木市教育委員会

茨木市は大阪府北部に位置し、北は老の坂山地を介して京都府亀岡市と接しています。市域北部の山々は広大な森林を控え、市域南部へと流れる各河川に豊かな水をもたらしました。市域を流れる元茨木川、安威川、勝尾寺川流域には、古くから人々の生活が営まれ、その結果、多くの文化財が受け継がれてきました。

しかし、大阪と京都を結ぶ地にある本市は、近年大規模な開発により宅地化が進み 土地利用の形態が変化したことで、これまでの残っていた多くの埋蔵文化財を現状の まま残すことが困難になってきました。

そのため、埋蔵文化財を記録して保存をおこなうことで、先人達から永く受け継がれてきた郷土の文化財を後世に伝えていく必要があります。

本書は、平成25年度に実施した個人住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告です。 本書に記しました耳原遺跡、茨木遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡は、いずれも市内を代表 する遺跡です。これらの調査1つ1つの積み重ねを郷土茨木の歴史的遺産として、広 く活用されることを望みます。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様に、ご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを、感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 26年 3 月 31日 茨木市教育委員会 教育長 八木章治

- 1. 本書は、平成 25年度国庫補助事業 (総額 4,644,865 円、国庫 50%、市費 50%) として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。平成 25年度事業として、平成 25年4月1日から平成 26年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。ただし、本書には、整理作業の都合から平成 25年1月から平成 25年12月末までに調査を終了したものについて登載した。
- 2. 調査の実施は、本市教育委員会社会教育振興課文化財係発掘調査員 大向智子、木村建明、 高村勇士、富田卓見、関梓、須田裕子、中東正之、藤田徹也が行った。
- 3. 本書の作成にあたっては、各調査担当者が執筆を行い、執筆分担は文末に記している。
- 4. 編集は、高村勇士と藤田徹也が行った。
- 5. 本書で使用している標高は、すべて T.P. (東京湾標準海水面)で表記し、各挿図に掲載した表記のうち、M.N. は磁北、また表記のないものは国土座標系 (第VI系) に基づく座標北を示す。
- 6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖』(小山・竹原編) に基づく。
- 7. 出土遺物及び図面・写真類は、埋蔵文化財の活用に資するため茨木市教育委員会文化財資料館(〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号TEL072-634-3433)において保管している。

目次

序文 例言

第1章 位置	置と環境		1
	1. 地理的環境 •		1
	2. 歷史的環境 •		1
第2章 平原	戈25年度 発掘調査一覧 ·		5
第3章 調查	査の成果 ・・・・・・・・		7
	耳原遺跡(MH13-1他)		7
	耳原遺跡 (MH13-2)	1	11
	春日遺跡 (KS13-3)	1	13
	春日遺跡 (KS13-4)	1	15
	春日遺跡 (KS13-5)	1	17
	茨木遺跡(IK13-1)	1	19
	茨木遺跡 (IK13-6)	2	23
	中条小学校遺跡(CJ13-4)	2	25
	中条小学校遺跡(CJ13-7)	2	27
	倍賀遺跡(HK13-2)		31
	牟礼遺跡 (MR13-8)		34
写真図版		3	37

挿図目次

	1445		A		
第1図	茨木市周辺地形図	2	第22図	茨木遺跡(IK13-6)調査区配置図	23
第2図	平成25年度 発掘調査地位置図	4	第23図	茨木遺跡(IK13-6)断面柱状図	23
第3図	耳原遺跡(MH13-1他)調査区配置図	7	第24図	茨木遺跡(IK13-6)調査地位置図	23
第4図	耳原遺跡(MH13-1他)調査位置図	7	第25図	茨木遺跡(IK13-6)調査区断面図·出土遺	24
第5図	耳原遺跡(MH13-1他)調査区平面·断面図	8	N150E	物実測図	
第6図	耳原遺跡(MH13-2)調査区配置図	11	第26図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査区配置図	25
第7図	耳原遺跡(MH13-2)調査位置図	11	第27図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査地位置図	25
第8図	耳原遺跡(MH13-2)調査区平面·断面図	12	第28図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査区平面·断	26
第9図	年// · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	13	第20 囚	中宋小字校退跡(CJ13-4)調宜区平面·断面図	20
第9凶 第10図	春日遺跡(KS13-3)調査位置図 春日遺跡(KS13-3)調査位置図	13	第29図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区配置図	27
				中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区配直区 中条小学校遺跡(CJ13-7)断面柱状図	
第11図	春日遺跡(KS13-3)調査区平面・断面図	14	第30図	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	27
第12図	春日遺跡(KS13-4)調査区配置図	15	第31図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査地位置図	27
第13図	春日遺跡(KS13-4)調査地位置図	15	第32図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区平面·断	28
第14図	春日遺跡(KS13-4)調査区平面・断面図	16	** • • · ·	面図・出土遺物実測図	<u>.</u> .
第15図	春日遺跡(KS13-5)調査区配置図	17	第33図	倍賀遺跡(HK13-2)調査区配置図	31
第16図	春日遺跡(KS13-5)調査地位置図	17	第34図	倍賀遺跡(HK13-2)調査地位置図	31
第17図	春日遺跡(KS13-5)調査区平面·断面図· 出土遺物 実測図	18	第35図	倍賀遺跡(HK13-2)調査区平面·断面図· 出土遺物実測図	32
第18図	茨木遺跡(IK13-1)調査区配置図	19	第36図	牟礼遺跡(MR13-8)調査区配置図	34
第19図	茨木遺跡(IK13-1)調査地位置図	19	第37図	牟礼遺跡(MR13-8)調査地位置図	34
第20図	茨木遺跡(IK13-1)調査区平面·断面図	20	第38図	牟礼遺跡(MR13-8)断面柱状図	35
第21図	茨木遺跡(IK13-1)出土遺物実測図	21	第39図	牟礼遺跡(MR13-8)出土遺物実測図	35
	写真图	図版[目次		
図版1:	耳原遺跡(MH12-3・MH13-1)				39
MH12-3	3 (西から) 上段				
MH13-1	(西から) 下段				
	耳原遺跡(MH13-3・MH12-4)				40
MH13-3 (西から) 上段					
MH12-4	1(西から) 下段				
図品と	耳原遺跡(MH13-5)他				41
	11 15 15 15 15 15 15 15 				41
	· 各調查区遠景				
-1//1/25//					
図版4:	耳原遺跡(MH13-2)・春日遺跡(KS	13-3)		42
MH13-2	2 全景(北西から) 上段		•		
	3 (東から) 下段				
図版5	春日遺跡(KS13-4・5)				43
K S 13-4	4 全景(北西から) 上段				
K S 13-5	5(西から) 下段				
	中条小学校遺跡 (CJ13-4·7)				44
	1 全景(北東から) 上段				
С Ј 13-7	7(西から) 下段				
□ □ □ □ □ □ □	英士鳴味 (エレ19 1 - C)				4-
	茨木遺跡(IK13-1・6) 				45
	第1面全景(北東か 上段 下段				
1 K 13-6	ら 南壁断面(北から) 下段				
図記	倍賀遺跡(HK13-2)・牟礼遺跡(M	D 1?_9	8)		46
	 	1110-0	U /		40
	3 北壁断面(南から) 下段				
1411(10 (

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町、南は 摂津市、北は京都府亀岡市に接しており、南北 17.05km、東西 10.07kmと、南北に長く東西に 短い市域を有している。

茨木市域の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三地域に大きく分けられる。北半部は、標高300m前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が広がる。南半西部は、標高50~100m前後で洪積層からなる千里丘陵があり、南半東部は、市域東部を南北に縦断する安威川などの河川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がり、大阪平野の一部をなす。また、北半部の北摂山地から南に佐保川が、北半部と南半西部の丘陵の間を東西に勝尾寺川が流れ、それらの両岸にも僅かに平地が存在する。

2. 歴史的環境

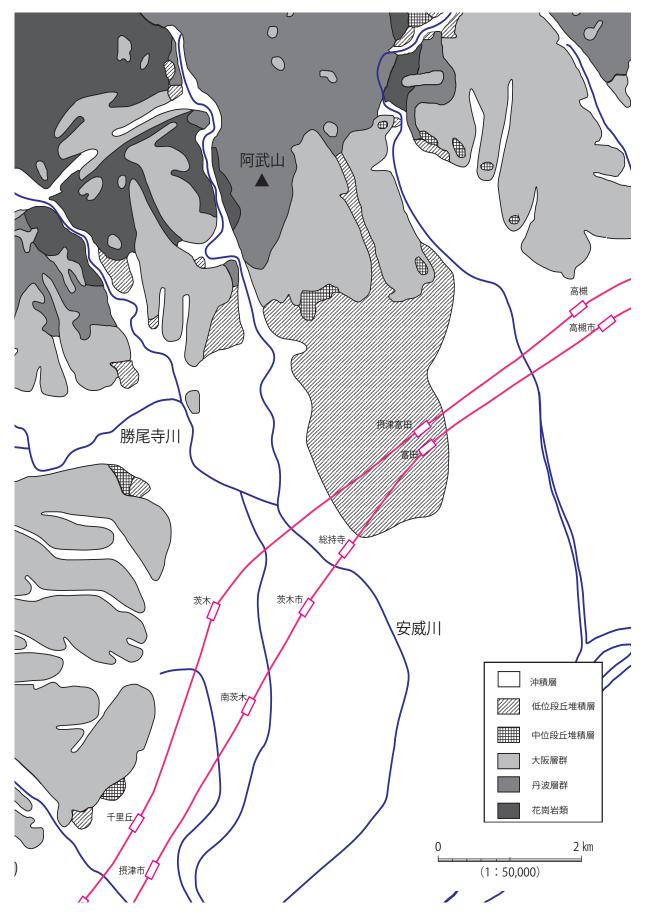
茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡、耳原遺跡、郡遺跡などで表面採集や後世の遺物包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ型石器や有舌尖頭器に認められる。また、平野部の微高地に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡においてもナイフ形石器が出土している。しかし、未だ明確な旧石器時代の遺構等は確認されていない。

縄文時代においても、前期から中期の遺跡は少なく、縄文時代中期から後期の土器が、西福井遺跡や初田遺跡、太田遺跡において出土している。縄文時代後期から晩期になると遺跡数は増加し、耳原遺跡において縄文晩期の深鉢棺墓群が検出され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。また、牟礼遺跡では、縄文晩期から弥生前期の土器や水田跡、井堰等が検出されている。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝咋遺跡、新庄遺跡に集落跡が見られる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成される。前期から継続している東奈良遺跡などが規模を拡大していき、さらに中条小学校遺跡や見付山遺跡、倍賀遺跡、中河原遺跡、春日遺跡、太田遺跡、玉櫛遺跡、詳細は不明であるが高地性集落の石堂ヶ丘遺跡などで集落が出現する。この中で、特に前期から継続して集落が確認される東奈良遺跡は、他地域の拠点的集落と同様、幾重もの環濠をめぐらせており、重要文化財に指定されている石製銅鐸鋳型などが出土していることから、青銅器などの鋳造工房を持つ地域の拠点的集落であると考えられている。中期には遺跡数がさらに増加し、河川の両岸や丘陵部、山地部まで広がりをみせる。

古墳時代になると、北部の丘陵に佐保川を挟んで紫金山古墳、将軍山古墳という全長 100m 前後の前方後円墳が相次いで築造される。紫金山古墳からは、三角縁神獣鏡を含む 12面の銅鏡や、貝製の鍬形石や車輪石、筒型銅器、武具などの副葬品が出土している。近接して築造された両古墳について、広瀬覚氏は『茨木市史』において、その出土遺物や、竪穴式石槨の向き、葺石のあり方などから、将軍山古墳には東四国地域との関係が、紫金山古墳には奈良盆地東南部や朝鮮半島との関係が密接であった可能性を指摘している。

古墳時代中期には、宮内庁により「継体天皇三嶋藍野陵」に治定されている前方後円墳、太



第1図 茨木市周辺地形図

田茶臼山古墳が全長 226mの規模で築造される。これと同時期の小規模な古墳 43基 (1基の円墳を除いて他はすべて方墳)が、総持寺遺跡において、密集して検出されている。これらの古墳の埴輪は高槻市新池埴輪窯で製作され、太田茶臼山古墳に供給されたものと共通の特徴を持ち、太田茶臼山古墳と総持寺遺跡の関連性が指摘される。

古墳時代後期には、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳などが築造される。特に、南塚古墳は、同時期の古墳と比較すると大規模な横穴式石室と装飾付台付壷が出土していることが特筆される。耳原古墳も大型の横穴式石室を持ち、内部に2基の刳り抜き式家型石棺がある。また、新屋古墳群、安威古墳群、将軍山古墳群、長ヶ淵古墳群、郡古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が、山麓部を中心に築造される。

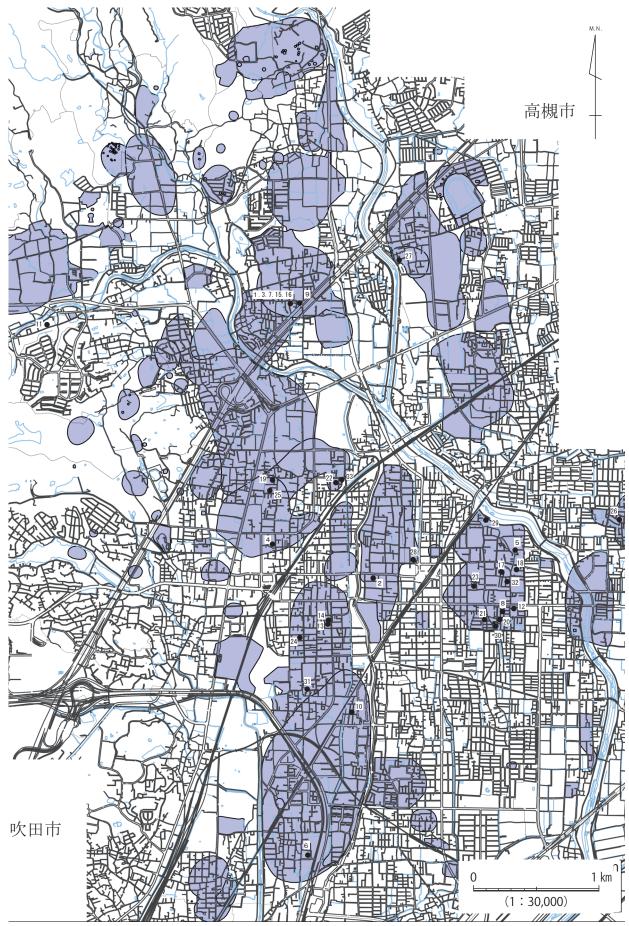
終末期古墳としては、棺内にガラス玉や金糸が出土し、藤原鎌足墓と目されている阿武山古墳などが築造され、『藤氏家伝』にある「三嶋別業」の存在を想起させる。

続く奈良時代になると、茨木市域は摂津職(国)嶋下郡に編成され、平城遷都にともない、 平城から山陽道諸国を連結し太宰府に達する道上に「殖村駅」が置かれた。また、未だ確定的 ではないが、郡という地名や掘立柱建物群、墨書土器などの出土、穂積廃寺の存在から郡遺跡 周辺が嶋下郡衙である可能性が指摘されている。また、総持寺遺跡や総持寺北遺跡においても、 総柱の掘立柱建物群や「調」とへラ書きされた須恵器、円面硯の破片が出土しており、官衙的 性格が指摘され注目される。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡や中条小学校遺跡、舟木遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、宿久 庄遺跡などが挙げられる。中でも、玉櫛遺跡は11世紀後葉・12世紀前葉~15世紀前葉頃ま で通して集落が営まれている。

中世末から近世初頭の遺跡には、茨木城、水尾城、三宅城、福井城、泉原城などの城郭がある。現在の茨木市中心部には茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷し、その内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令(元和元年、1615年)により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも、発掘調査によって得られる知見は、茨木城周辺の実像の解明に向けて重要となるであろう。

参考文献茨木市 2012『新修 茨木市史 第一巻 通史 I』 茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』 茨木市教育委員会 2002『平成 13年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2013『平成 24年度発掘調査概報』 中村博司編 2007『よみがえる茨木城』



第2図 平成25年度 発掘調査地位置図

第2章 平成25年度 発掘調査一覧

番号	所在地	遺跡名	実施日	調査担当	特記
1	耳原一丁目281-8	耳原遺跡	H25. 4. 8~4. 9	中東	本書所収
2	大手町1653-3, 1653-4	茨木遺跡	H25. 6. 27∼7. 3	大向	本書所収
3	耳原一丁目281-9	耳原遺跡	Н25. 7. 22	中東	本書所収
4	春日一丁目84-5	春日遺跡	H25. 8. 5∼8. 7	中東	本書所収
5	中村町571-4	牟礼遺跡	Н25. 6. 27	木村	遺構・遺物なし
6	沢良宜西二丁目127-6	東奈良遺跡	Н25. 6. 11	木村	遺構・遺物なし
7	耳原一丁目281-10	耳原遺跡	Н25. 7. 22	中東	本書所収
8	園田町798-21	牟礼遺跡	Н25. 7. 3	関	遺構・遺物なし
9	耳原一丁目276-5	耳原遺跡	H25. 7. 25∼7. 26	大向	本書所収
10	東奈良一丁目661-1	東奈良遺跡	Н255. 7. 22	富田	遺構・遺物なし
11	宿川原町982, 983	西国街道	H25. 8. 23	中東	遺構・遺物なし
12	園田町612-2, -6, -4・613-12	牟礼遺跡	H25. 9. 4	中東	遺構・遺物なし
13	下中条町23-2, 24-7, 25-2	中条小学校遺跡	Н25. 9. 17	大向	遺構・遺物なし
14	西中条町140-7,140-13の一部	中条小学校遺跡	H25. 8. 27	大向	本書所収
15	耳原一丁目281-11	耳原遺跡	Н25. 9. 5	中東	本書所収
16	耳原一丁目281-7	耳原遺跡	Н25. 9. 5	中東	本書所収
17	中津町885-16	牟礼遺跡	Н25. 10. 8	木村	遺構・遺物なし
18	中津町560-1	牟礼遺跡	Н25. 9. 18	大向	遺構・遺物なし
19	春日五丁目77-15	春日遺跡	H25. 9. 24∼9. 25	大向	本書所収
20	園田町745-5	牟礼遺跡	Н25. 10. 8	木村	遺構・遺物なし
21	園田町754-2・754-5	牟礼遺跡	Н25. 11. 6	富田	遺構・遺物なし
22	春日四丁目228-3	倍賀遺跡	H25. 11. 18∼11. 19	木村	本書所収
23	中津町837-1,837-8	牟礼遺跡	Н25. 10. 8	木村	遺構・遺物なし
24	西中条町137-5	中条小学校遺跡	Н25. 10. 10	中東	遺構・遺物なし
25	春日五丁目204-29	春日遺跡	Н25. 10. 30	木村	本書所収
26	鮎川二丁目84-7	鮎川遺跡	Н25. 11. 18	高村	遺構・遺物なし
27	太田一丁目712-6,-9	太田遺跡	Н25. 11. 12	富田	遺構・遺物なし
28	別院町1437-1, 1437-3の各一部	茨木遺跡	Н25. 12. 2	高村	本書所収
29	末広町31-1の一部	牟礼遺跡	Н25. 12. 3	高村	遺構・遺物なし
30	園田町749-24,749-25	牟礼遺跡	Н25.11.14	高村	本書所収
31	奈良町590-2,591-2の一部	中条小学校遺跡	H25. 12. 11∼12. 12	高村	本書所収
32	中津町858-25	牟礼遺跡	Н25.126	高村	遺構・遺物なし
33	春日四丁目227-7,227-8	倍賀遺跡	H25. 12. 16	高村	遺構・遺物なし

第3章 調査の成果

耳原遺跡 (MH 13-1 他)

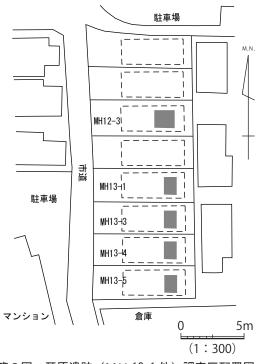
所 在 地 茨木市耳原一丁目

調査期間 平成25年4月8日(他)

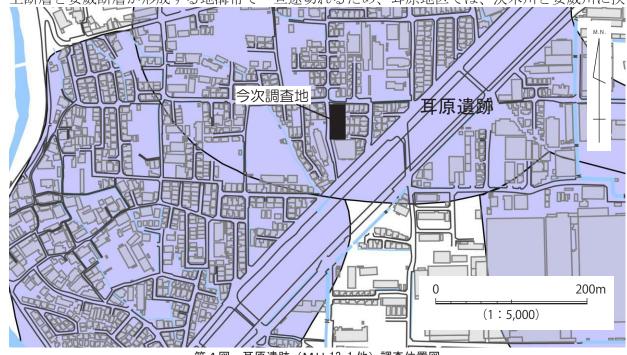
調查担当 中東正之・大向智子

調査に至る経過

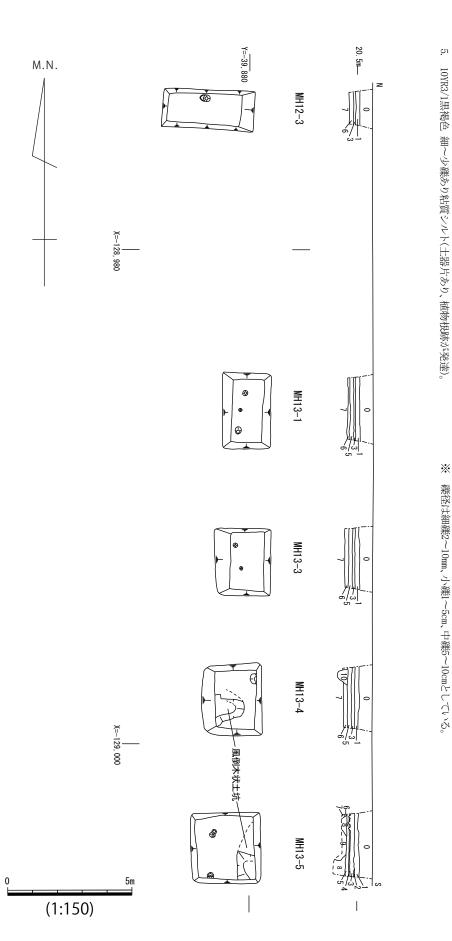
本調査は、耳原一丁目で計画された個人住宅に伴 い確認調査をおこなったところ、包含層・遺構等が 認められたため、本発掘調査をおこなった。なお、 同地における宅地化によって、平成25年3月から順 次、93条の届出が提出された。個々の調査区は、極 めて関連性が強いものであり、そのため、平成25年 12月までに終了した調査については、一括して報告 する。 耳原遺跡は、耳原の帝人大阪研究センター の建つ高台から名神高速道路を越えたあたりまで、マンション 南北約800mの舌状を呈する台地地形(低位段丘低位



面) を中心に展開する、縄文時代晩期から弥生時代 第3図 耳原遺跡 (MH 13-1 他) 調査区配置図 中期後半の集落を主体とする遺跡である。この低位段丘は、茨木市北部丘陵地域から平野へ流 れ出る安威川右岸の山麓部から派生し、名神高速道路を越えたあたりまで約2kmに渡って南に 延びる。山麓部では、安威の集落の載る扇状の地形(低位段丘中・高位面)を形成するが、真 上断層と安威断層が形成する地溝帯で一旦途切れるため、耳原地区では、茨木川と安威川に挟



第4図 耳原遺跡 (MH 13-1 他)調査位置図



5Y3/1オリーブ黒色 細礫あり腐植に富む砂質シルト。

現代盛土。

5Y4/1灰色 細礫あり腐植含む砂質シルト。

酸化沈積物混浸 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトの細礫含

10YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/2黒褐色粘質シルトの混土(3.と近似しているが、締まり良

9.

10YR5/3~5/4にぶい黄褐色 細~少礫あり砂質シルト。

7.の偽礫わずかに含む10YR3/2黒褐色 (上位)~10YR2/1黒色(下位)細~少礫あり粘質シルト。

œ

質が砂礫がに転じ、中礫もみられる)。

10YR3/2黒褐色 細~少礫あり粘質シルト(上位)~10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(下位) 細~少

10YRS/2黒褐色 (上位) ~10YR5/4ごぶい黄褐色 (下位) 細~少礫あり粘質シルト(植物根跡が到達). 10YR5/3~5/4ごぶい黄褐色 細~少礫あり砂混粘質シルト(5号地では礫質となる。その下位では基

薬あり砂質シスト。

7.

む混土(土器片わずかにあり、3号地では下位層の偽礫含む)。

第5図 耳原遺跡 (MH 13-1 他) 調査区平面·断面図

まれた沖積平野に独立した台地として認識される。

基本層序

調査地は、台地地形南端の西側縁辺付近に位置する。当地西方には段丘構成層を示すと思われる小崖が断続的に見られるが、低地との比高差はわずかなため、現氾濫原面に分類される立地である。宅地化以前は南へ下る緩傾斜地に展開する水田および畑地であった。

現状は、前面道路並みに盛土整地された更地である。現地表面は標高約 21.1m を測る。基本 層序は、上層より、第 0 層(約 0.5m)は現代盛土層である。

第 $1 \cdot 2$ 層(約0.2m)は、近現代の耕作土層である。第 $3 \cdot 4$ 層($0.1 \sim 0.2$ m)は、締まりのある人為層で、水田鋤床に相当すると思われる。第5 層($0.1 \sim 0.18$ m)の黒褐色礫あり粘質シルトは、わずかに弥生土器とみられる細片を含む包含層である。集落が展開した時期の旧表土に対応すると思われる土壌化層である。第6 層($0.1 \sim 0.2$ m)の黒褐色~にぶい黄褐色礫あり粘質シルトは、遺跡の基盤層となるが、第5 層からの土壌化が及んでいる漸移層である。稲の根跡が到達しているところから、水田の有効土として機能していたことが伺われる。断面観察では、本層上面から切り込む遺構を確認しているが、平面プランでは平準化されて見えるため、遺構検出面として捉えることはできなかった。第7 層のにぶい黄褐色礫あり砂混粘質シルトは基盤層である。段丘構成層もしくはこれを被覆する沖積層と考えられる。粘質シルトを基質とし、北側では砂礫が優勢となる。いずれも下位では堅固な礫層に転ずるとみられる。尚、第 $8 \cdot 9$ 層は風倒木状の土坑埋土、第10 層はピット埋土である。

遺構

遺構検出は、第7層を検出面とした。検出面の標高は、19.9~20.1mを測る。 各調査区合わせ、 ピット11 基と風倒木状の土坑2基である。ピットは、実際の成立面からの規模を考慮しなけ ればならないが、7 号地東壁にかかるものを除けば、径 20cm 以下、深さ 10cm 程度の小形のも のである。いずれも柱痕は確認できず、その配列も建物などを構成する柱穴として認識するこ とはできなかった。埋土は包含層に近似した単一層で、一部に基盤層の偽礫を含む。風倒木状 の土坑は、7・8 号地で検出した。調査区外に至るため全容は不明であるが、8 号地ではトレン チ幅を超える 2.5m 以上、深さ 0.6m 以上を測る。内部に偽礫や堀方などの人為痕跡がなく、傍 らの基盤層とほぼ同様の土塊が何らかの外力で転回したように充填され、この土塊を包むよう な形で暗色層が貫入している。暗色層を追って全堀することはできなかったが、これを全堀す ると、いわゆる風倒木痕として認識される、楕円や三日月状の平面形で椀状の窪みとなるとみ 遺物は、5号地床土層の瓦器と5・6・7号地包含層の弥生土器がある。遺構から出 土したものはなかった。いずれも摩滅した破片である。弥生土器については甕もしくは壺の底 部付近と部位不明の破片である。器面調整は摩滅のため不明であるが、タタキは認められない ため、弥生時代中期以前のものと考えられる。胎土は密で2~3mmの砂粒を含む、在地系の まとめ耳原遺跡は、茨木川と安威川に挟まれた沖積平野にあって、独立した形 の段丘上を中心に展開している。 本調査では、段丘構成層もしくはそれを被覆する沖積層を 基盤とする、集落の一端を示す遺構面を検出した。土壌化が強く進行していることと、洪水等 による地層の塁重が見られないことから、長期間安定した環境が続き、人間活動が営まれてい たことが伺われる。耳原遺跡の南端で沖積面に埋没する低位段丘は、茨木川と安威川の合流地 点付近まで続いており、山麓からの総延長は約2.7kmに渡っているとされている。この低位段丘を基底に持つ沖積面(低位段丘埋没面)においても、縄文時代晩期から弥生時代前期の集落である五日市東遺跡があらたに発見されている。隣接する耳原遺跡との関係など、三島地区では数少ない縄文時代から弥生時代への移行期の集落の解明は、三島地区の同時期の集落の消長を探るうえでも注目される。今後の発掘調査に期待したい。(中東)

参考文献

茨木市広報広聴課市史編纂室 2012「新修茨木市史第1巻 通史編1」 名神高速道路内遺跡調査会 1998「耳原・五日市遺跡発掘調査報告書」

耳原遺跡 (MH 13-2)

調查地 茨木市耳原一丁目

調査期間 平成25年7月25日~7月26日

調查担当 大向智子

調査に至る経過

本調査は、茨木市耳原一丁目で計画された個人住宅 建設に伴う発掘調査である。平成25年7月25日に確 認調査をおこない、包含層及び遺構を確認したため、 本発掘調査をおこなった。申請箇所の西側約16.5㎡ を対象とした。

水路 道路 X=-128,960m (1:400)

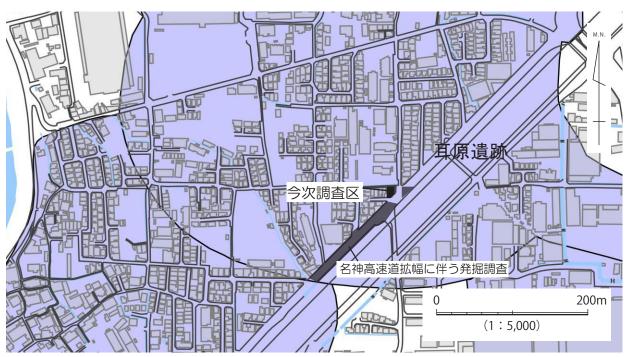
第6図 耳原遺跡 (MH 13-2) 調査区配置図

基本層序

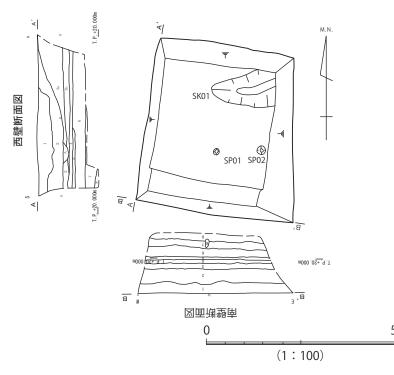
南壁面では、盛土 (層厚約 60cm) 直下から①作土: 5B5/1青灰色極細粒砂まじり粘質シルト (約 15cm)

②作土: 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂まじり粘質シルトにマンガン粒含む (約 10cm) ③作土: 2.5Y5/3黄褐色極細粒砂まじり粘質シルトにマンガン粒含む (約 8 cm) ④包含層:10YR3/1黒 褐色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む (約 30cm) ⑤ベース土:10YR5/2灰黄褐色極細粒砂まじり粘質シルト (約 20cm) ⑥地山:10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトまじり粗砂に大礫多量に含む (20cm以上) が堆積している。西壁面では①層が厚く堆積するが、その他の基本層序は同じである。

盛土内には、ブロック状の④層の土が多量に含まれていることから、過去の工事の際に包含層の一部が削られ盛られている可能性が高い。包含層上面からの遺構の切り込みを確認で



第7図 耳原遺跡 (MH 13-2) 調査位置図



きなかったため、⑤層上 面で遺構検出を行った。 包含層検出面は T. P. + 20.0m、遺構検出面は T. P. + 19.7~ 19.8mであ る。

遺構・遺物

ピット2基と土坑1基を検出した。各遺構の埋土は、包含層と同一の埋土であった。出土遺物としては、土師質の土器等5mが認められるが、磨耗が著しく時期の特定はできない。SP01、SP02とも

に直径約15~20cm、深 さ約15cmであり、どち らも単一の埋土であるた め埋没時期は、ほぼ同時 期であると考えられだ る。まとめ 本調査にお いて、層厚約20~30cm

1. 盛土 2.5Y6/2 灰黄色大礫まじり粗砂

2. 盛土 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック、2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルトブロックの混土 に直径約 15~ 20cm、深

- 3. 作土 5B5/1 青灰色極細粒砂混じり粘質シルト
- 3a. 7.5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト
- 3b. 5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト
- 4. 作士 2.5Y5/2 暗灰色極細粒砂混じり粘質シルトマンガン粒含む
- 5. 作士 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂混じり粘質シルト、上面酸化、マンガン粒含む
- 6. 包含層 10YR3/1 黒褐色極細粒砂混じり粘質シルト、土師質土器片(摩滅著しい)含む
- 7. ベース土 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂混じり粘質シルト 6 層貫入
- 8. 地山 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトまじり粗砂、大礫、多量に含む
- A. 5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト

第8図 耳原遺跡 (MH 13-2) 調査区平面·断面図

の厚い包含層とピット2基、土坑1基を検出した。遺物に関しては時期を特定できるものを確認できなかったが、弥生時代の所産であろうか。当該地に近接する名神高速道路拡幅に伴う発掘調査の成果によれば、当該地の東側では遺構の密度は低く、遺物量も少ない。また、標高20.0m付近で包含層を、19.8m付近で地山面を検出しており、今回の調査成果と同様の成果がみられる。それらと比較して当該地の南側の調査では、弥生時代中期前半の竪穴住居や多数のピット、土坑が検出されている。地山面の標高は東端で19.2m、西端で19.8mを測り、緩やかな傾斜がみられる。これらの状況から当該地は茨木川と安威川に挟まれた舌状に張り出した台地上に位置しており、弥生時代の集落は安威川へ向かって下る緩やかな傾斜地にかけて広がっていたと考えられ、当該地は、こうした耳原遺跡弥生時代集落の一端として捉えられる。(大向)

参考文献

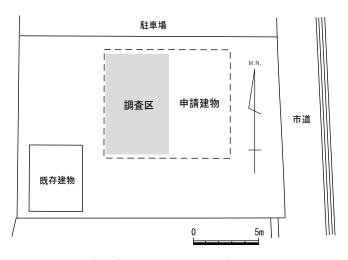
名神高速道路内遺跡調査会 1998 『名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第8輯 中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う耳原遺跡・五日市遺跡発掘調査報告書』

春日遺跡 (KS 13-3)

所 在 地 茨木市春日一丁目 84番 5 調査期間 平成 25 年 8 月 5 日~ 7 日 調査担当 中東正之

調査に至る経過

春日遺跡は、千里丘陵から派生した緩傾斜面(低位段丘を覆う沖積面)に展開する、弥生時代中期から中世の複合遺跡である。本調査地は、包蔵範囲の南端部に位置する。春日一丁目において個人住宅建設に伴い93条が提出されたため、



第9図 春日遺跡(KS 13-3)調査区配置図

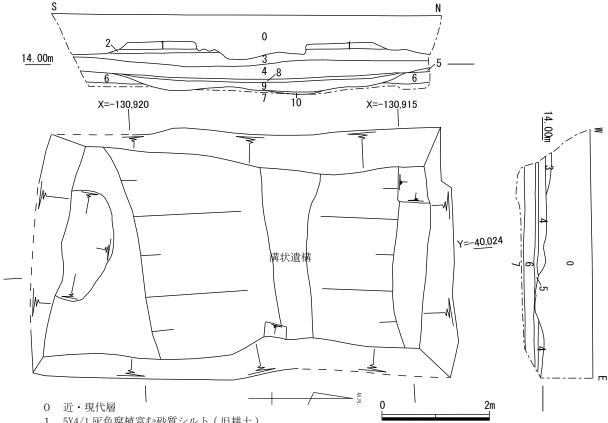
平成25年8月に確認調査をおこなった。結果、既往の調査と類似する包含層と考えられる層を検出、また、その層直下より切り込む遺構を確認したため、本発掘調査をおこなった。

基本層序

現地表面は、標高約14.9mを測る。基本層序は、上層より、第0層(約0.5m)は現代盛土層である。第1・2層(約0.2m)は近現代の耕作土層である。第3層(約0.2m)の鈍い黄褐色粘土混シルト質中~粗粒砂は、主に第4層を母材とし、耕土由来の偽礫を含む、近世以降の鋤床層である。第4層の灰色シルト質中~粗粒砂は、洪水運搬物に由来すると考えられるが、その時期は不明である。第5層(約0.05m)のオリーブ褐色粘質シルトは、旧表土に相当する土壌化層と考えられる。遺物は出土しなかったが、層序的には、春日遺跡の古い段階の包含層に



第10図 春日遺跡(KS 13-3)調査位置図



- 1 5Y4/1 灰色腐植富む砂質シルト(旧耕土)
- 2 2.5Y5/1 黄灰色腐植あり砂質シルト(旧耕土)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘土混シルト質中~粗粒砂(鋤床層)
- 4 7.5Y5/1 灰色シルト質中~粗粒砂 (Fe 混浸、洪水層)
- 5 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 (上位)~2.5Y5/3 黄褐色 (下位)シルト質粘土 (漸移層)
- 5Y7/1 灰白色に 10YR5/6 黄褐色の斑状砂混シルト質粘土(地山層)
- 8 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土
- 9 10YR4/1 褐灰色に 10YR2/1 黒色の班状シルト質粘土 (炭化物・地山の偽礫含む)
- 10 10YR4/1 褐灰色砂混粘質シルト

第11図 春日遺跡(KS13-3)調査区平面·断面図

相当すると推測される。第6層の灰黄褐色~黄褐色シルト質粘土(約0.2m)は、漸移層である。 第7層の灰白色に黄褐色の斑状砂混シルト質粘土は基盤層である。

遺構

検出遺構は、標高 13.85m を測る第6層上面から切り込む、溝幅4.2~4.8m、深さ0.2~0.25m を測る、東西方向の溝である。埋土は3層に分かれる。上層の明黄褐色シルト質粘土は、当初 基盤層と錯誤したほど似た層相であった。中層の褐灰色に黒色の斑状シルト質粘土は、炭化物 と基盤層の偽礫を含む。下層は、褐灰色砂混粘質シルトである。埋土からは流路としての機能 は想定し難い。遺物は全く出土しなかったが、炭化物や基盤層の偽礫を含むことから、古墳の 周溝であった可能性が考えられる。

まとめ

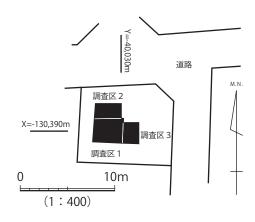
平成24年度に当地の東側約40mの地点で発掘調査が実施されている。包含層と遺構面が検 出されているが、希薄な様相であり、その性格や時期は不明であった。当地は春日遺跡の集落 の縁辺部にあたると考えられるが、その土地利用の状況については、今後の調査例の増加を待 ち、検討したい。(中東)

春日遺跡 (KS 13-4)

調査地 茨木市春日五丁目 77-15 調査期間 平成 25年 9 月 24・25日 調査担当 大向 智子

調査に至る経過

春日五丁目で計画された個人住宅建設に伴い確認 調査をおこなったところ、包含層および遺構を確認 したため、本発掘調査をおこなった。なお、残土置 き場の関係から、調査区を3つに分けている。その



ため、便宜上、確認調査とその面積を広げた調査区 第12図 春日遺跡(KS 13-4)調査区配置図 を調査区1、その北側に延長した部分を調査区2、調査区1東側を拡張した部分を調査区3と呼称し報告する。

基本層序

南壁面では、盛土(層厚約 40cm)直下から①作土:5Y5/1灰色極細粒砂まじり粘質シルト(約 10cm)②床土:5Y6/1灰色極細粒砂まじり粘質シルト(約 5 cm)③包含層 1:10YR5/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む、マンガン粒多量に含む(約 6 cm)④包含層 2(遺構面 1):10YR6/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む(約 5 cm)⑤地山(遺構面 2):10YR6/6明黄褐色粘質シルトが堆積する。④層上面から切り込む遺構と⑤層の地山を切り込む遺構があり、遺構面は 2 面存在する。西壁面では、南から北へかけて③の包含層が 15~20cmの層厚となり、④の包含層がなくなる。



第13図 春日遺跡(KS13-4)調査地位置図

遺構

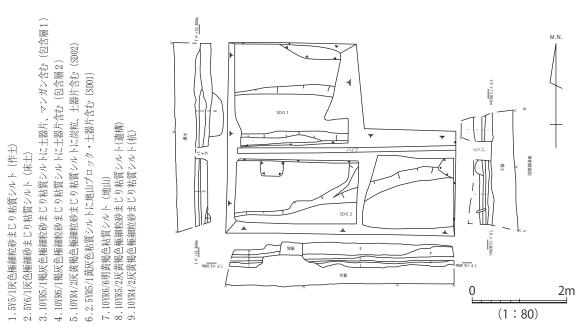
調査区1では、北側と南側で溝を2条検出した。北側で検出した溝(SD01)は南肩のみ検出しており、南側で検出した溝(SD02)は北肩のみ検出した。調査区2で、SD01の北肩を検出し、幅約1mの東西へのびる溝を確認した。深さ約30cmの溝で、埋土として2.5Y5/1黄灰色粘質シルトに地山ブロック含むが堆積し、遺物として須恵器片と土師質土器片が出土している。また、SD02の広がりを確認するため設けた調査区3では、全体が10YR4/2灰黄褐色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒含む、の埋土で覆われており、SD02の全貌を明らかにすることができなかった。ただし、調査区1で、SD02の北肩を検出しており、全体として南西から北東方向へのびる溝と考えられる。遺物として、土師質土器片が出土している。包含層内からも、須恵器甕の体部片や土師質土器片が出土しているが、出土した全ての遺物が細片のため詳細な時期を特定できない。

まとめ

当該地は弥生時代から中世にかけての複合遺跡である春日遺跡包蔵地内に位置する。東側には倍賀遺跡、北側には郡遺跡が広がり、春日遺跡包蔵地の北東側縁辺部にあたる。本調査での遺構検出面は地山直上で T. P. +15. 6mである。また、包含層 1 の直上でも遺構の存在を確認できており、T. P. +15. 7mである。平成 22年度に行われた当該地から北へ約 200m離れた場所での調査では、包含層 2 は存在せず、包含層 1 と同様の層が約 20cmの厚さを保って堆積している。 T. P. +15. 5mで地山を検出し、その地山を切り込んで南北へのびる溝が確認されている。この溝は遺物を含んでおらず、周辺の調査から古墳時代後期頃のものである想定がなされている。本調査時に検出した溝との関わりは不明であるが、遺構及び包含層からの出土遺物の様相から古墳時代以降に形成されたものと想定できるため、同時期に存在していた溝の可能性が考えられる。今回の調査では、2 期にわたる包含層が残る境界を確認することができた。また、春日遺跡の縁辺部に位置することから、集落を区切る溝の可能性を考えることができる。(大向)

参考文献

茨木市教育委員会 2011『平成 22年度発掘調査概報-個人住宅建築に伴う発掘調査報告-』



第 14 図 春日遺跡 (KS 13-4)調査区平面·断面図

(春日遺跡 (KS 13-5)

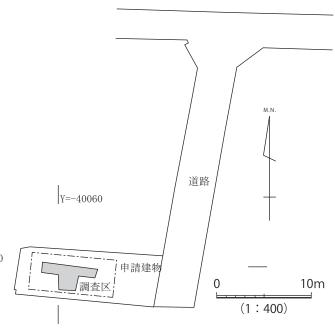
所在地 茨木市春日五丁目 204番 29 調査機関 平成 25 年 10 月 30 日 調査担当 木村 健明

調査に至る経過

春日遺跡は、茨木市の西北部、 千里丘陵からのびる低位段丘と茨 木川が形成した扇状地に位置する 弥生時代から中世にかけての複合 遺跡である。北西部は郡遺跡、北 東部は倍賀遺跡と接する。今回の 調査は、個人住宅建設に伴い、約 X=-130485.0 7.5㎡の調査を実施した。

基本層序

現地表面の標高は16.0m前後 を測る。盛土(厚さ50cm)の下



第15図 春日遺跡(KS13-5)調査区配置図

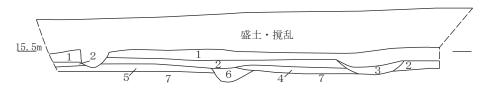
に灰色粗砂混じり粘質シルト層 (旧耕作土・厚さ 15cm)、灰オリーブ色粗砂混じり粘質シルト層 (厚さ 10cm) があり、その下に遺物包含層である暗灰黄色粘質シルト層 (厚さ 10cm) が存在する。包含層の下は、地山である灰白色~明黄褐色粘土層となる。

遺構

調査区の中央付近で、南北方向の溝1条を検出した。検出長85cm、幅50cm、深さ20



第16図 春日遺跡(KS13-5)調査地位置図



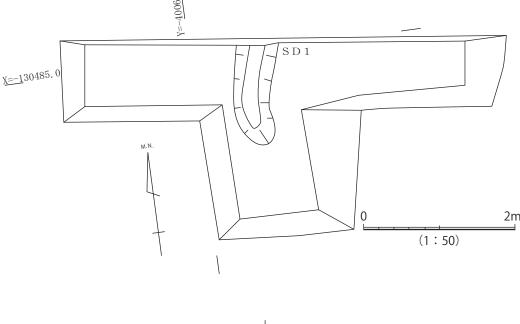
- 1. 灰色 (N4/) 粗砂混じり粘質シルト (旧耕土) 2. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂混じり粘質シルト 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルト (しまり悪い) 4. 暗灰黄色 (2.5Y4/1) 粘質シルト (包含層)

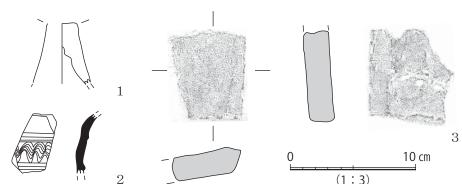
- 5. 灰色 (5Y4/1) 粘質シルト (包含層)
- 5. 灰色 (2.574/1) 北質シルト (灰色粘質シルト混じる・S D 1 枚土) 7. 灰白色 (7.577/1)・明黄褐色 (2.576/6) 粘土

cmを測る。 南側は端を 確認したが、 北側は調査 区外に延び る。埋土は 黄灰色粘質 シルト層で ある。遺物 は出土して いない。

遺物

 $1 \sim 3 \text{ id}$ いずれも包 含層からの 2m 出土である。 1は、土師 器高杯脚部 である。残 存 高 4.7cm を測る。内 外面とも磨 滅が著しく、 調整は不明 である。上 面は剥離し たような様 子であり、 杯部とは接





第17図 春日遺跡(KS13-5)調査区平面·断面図·出土遺物実測図

合面で分離したものと思われる。2は須恵器壺である。頸部の破片と思われる。断面三角形状 の突帯2条と、各突帯下に凹線を施す。また突帯の間に櫛描波状文を施す。3は平瓦である。 狭端面と側面の片側が残存する。残存長 7.0cm、残存幅 5.3cm、厚さ 1.7cmを測る。凹面・凸 面ともナデを施す。凹面側縁に面取りを施す。色調は橙色からにぶい黄橙色を呈する。

まとめ

今回の調査は狭小な面積でおこない、遺物包含層の存在を確認し、溝1条を検出したのみで あった。しかし、過去におこなわれた周辺の確認調査においても、今回と同様に遺物包含層の 存在が確認されており、周辺にも更に遺構が分布していると考えられる。周辺は既に宅地となっ ており、広範囲の調査をおこなうことは難しいことから、今回のような小規模な調査成果を蓄 積していうことで、周辺の様相が明らかになっていくと思われる。(木村)

茨木遺跡 (IK 13-1)

調査地 茨木市大手町 1653番 3 及び 1653番 4

調査期間 平成25年6月27日~7月3日

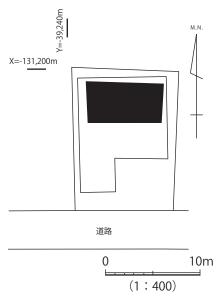
調查担当 大向智子

調査に至る経過

茨木市大手町において個人住宅建設の計画がなされ、確認調査をおこなったところ、遺構・遺物等が認められたため、本発掘調査をおこなった。調査面積は36㎡である。

基本層序

今次調査区の基本層序として、調査区全域に約20cmの現代盛土が認められ、①2.5Y5/1黄灰色粘質シルト混じり細粒砂(層厚約5~20cm)、②10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり粘質シルト(層厚約

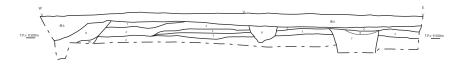


第 18 図 茨木遺跡 (I K 13-1) 調査区配置図

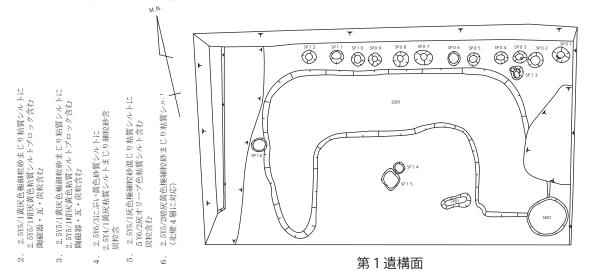
10cm)でその下③2.5 Y5/2 暗灰黄色極細粒砂混じり粘質シルトとなる。③層は、茨木遺跡周辺でみられる湿地性堆積層の様相を呈している。周辺の調査では、③層に相当する層から須恵器等が出土している例もあるが、今次調査において③層での出土遺物は確認できず、また、壁際に側溝を設置し下層観察もおこなったが、③層から切り込む遺構は確認できなかった。次に示す各遺構は、①層上面と②層上面で検出しており、それぞれ第1面、第2面検出遺構として報告をする。(大向・藤田)



第19図 茨木遺跡(IK13-1)調査地位置図



- 盛土 2.5Y4/1黄灰色細粒砂まじり粘質シルト 瓦・陶磁器・大礫を多く含む
- 1. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂まじり粘質シルト
- 2. 2.5Y5/1黄灰色粘質シルトまじり細粒砂、瓦片含む (1面上面)9.
- 3. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂まじり粘質シルト (2面上面)
- 4. 2.5Y5/2暗灰黄色極粒砂まじり粘質シルト (西壁 6 層に対応)
- 5. 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂まじり粘質シルト
- 6. 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂まじり粘質シルト 土器片含む
- 7. 2.5Y5/3黄褐色粗碎
- 8. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂まじり粘質シルトと 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂まじり粘質シルトが混じる
 - 5Y5/2暗灰黄色細粒砂まじり粘質シルトに
 5Y6/3にぶい黄色粘質シルトプロック含む、直径5cm大の礫まばらに含む
- 10. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂まじり粘質シルトに 2.5Y5/3黄褐色粘質シルトブロック、炭粒含



第20回 茨木遺跡 (IK13-1)調査区平面·断面図

遺構

第1面調査区北端で柱列を12基検出した。直径約30cm、深さ5~15cmの柱列が東西方向に延びており、東側は調査区外へ続く可能性がある。西側は、撹乱によって確認できなかったが、後述するSD1と関連性があるものと考えた場合、調査区内に収まる可能性もある。SP06~11にかけての断面からは、腐食した木の痕跡を確認できる。また、SP06の表面には焼土が認められる。各ピット内からは磁器や瓦などが出土している。

SD1はコの字状の平面形で幅約130cm、深度約10cmを測る。平面的特徴から、区画を意識

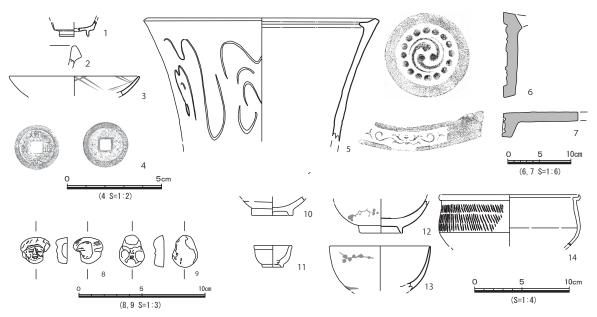
した溝、あるいは建物基礎土台等の可能性があるが詳細は不明である。 第2面

井戸2基、溝、土坑等を検出した。SE01は北側壁際で検出した。幅約80cmで、遺構中央の落ち込んだ部分に瓦片を含む薄い粘質シルトの堆積がみられるものの、それ以下は均一の粗砂が堆積しており遺物は含まない。検出面から約50cmの深度で湧水層が認められる。SE02は調査区中央付近で検出した。直径約200cmを測る。堆積状況はSE01と同様で、検出面から約60cm下げると湧水層がある。

いずれも井戸であると考えられるが、最下層まで掘削をおこなうことができなかったため、遺構の厳密な所属時期は不明である。また、人為的な埋戻しの様相もみられるが、第1面を構成するベース土とは異なるため、埋戻し時期も不明である。SD02はL字状の平面形を呈している。西側は、調査区外へと延び、北側は木痕と考えられる土坑状の掘り込みに削平を受けているため、詳細は不明であるが、第1面で検出した柱列の途切れる位置を踏まえて考えた場合、SD02を境として土地区画や建物範囲が分かれている可能性もある。(藤田)

遺物

1はSP07から出土した磁器片で、復元高台径 3.5cm、残存高 1.8cmをはかる。正八角形の小碗で、全体に透明釉を施しており、外面には吉祥文の盃や丁字などが描かれている。また、2は、SP11から出土したホウロクの口縁部で、19世紀初頭以降の所産と考えられる。3は磁器の皿で、復元口径 13.8cm、残存高 2.0cmをはかる。全体に透明釉を施しており、内面には草文が描かれている。染付けの発色が悪い。4は、寛永通宝で「寶」字下部が「ハ」となる「ハ貝宝」である。背面は無地である。1668年以降、明治期まで鋳造が続くため時期の特定は難しいが、19世紀頃におさまるであろう。5は、SE02から出土した瀬戸の水瓶である。復元口径 24.8cm、残存高 13.0cmをはかる。全体に黄瀬戸釉を施し、緑釉や鉄釉などの複数の釉薬を掛け流している。外面には丸彫りの唐草文が描かれており、18世紀後葉以降の所産である。また、6は軒丸瓦で、珠文の数が 16個、巴文の尾が他のものと重ならず、独立している。瓦当面に剥離材としてキラコが用いられている。外縁と内縁の幅が広く、概ね 18世紀中頃以降



第21図 茨木遺跡 (IK13-1) 出土遺物実測図

の所産であると考えられる。7は軒平瓦で、三葉文下部の萼の先端が二又に分かれる。また、 左右両端の唐草文の枝葉が大きい。中心の実の肥大化はまだみられないことから、概ね18世 紀中頃の所産である。

8・9は調査区北西端の SK04から出土した泥面子である。 8 は、おたふくを象ったもので、高さ 3.2 cm、幅 2.5 cm、厚さ 1.0 cmのものである。 9 は、恵比寿を象ったもので、高さ 2.6 cm、幅 2.9 cm、厚さ 1.1 cmのものである。 いずれも型押しでつくられたもので、 9 は裏面に指押しの痕跡がのこる。 概ね 18世紀後半の所産である。

10は SK02から出土した陶器の碗である。高台径 4.4cm、残存高 2,0cmをはかる。内面に透明釉が施されるものの、外面は露胎している。見込み部に砂目の跡が残る。11は SK03から出土した陶器の小碗である。復元口径 4.0cm、復元高台径 2.2cm、高さ 2.3cmをはかる。

その他、遺構以外から出土した遺物で、実測し得たものを12~14に示した。12は酉側側溝内から出土した磁器で、復元高台径4.6cm、残存高2.5cmをはかる。見込み部には蛇の目釉剥がみられ、畳付にははなれ砂が付着している。外面には梅花文が描かれており、全体に透明釉が施されている。染付けの発色が悪い。13は、北側側溝内から出土した磁器で、12同様全体に透明釉が施され、梅花文が描かれた碗である。復元口径10.8cm、残存高4.7cmをはかる。14は、1面精査時に出土した行平鍋の口縁部である。体部外面にトビカンナ痕を有し、伊賀焼きの可能性が考えられる。18~19世紀の所産と考えられる。(大向)

まとめ

今次調査区では 2 時期の遺構面を確認した。各面から出土した遺物の所属時期をみると、いずれも $18\sim19$ 世紀代の範疇で捉えられ、その転換期について確定的な情報は得られなかった。北壁断面をみてみると第 2 面を検出した②層が、調査区中央からやや西よりの位置で切れており、第 1 面を構成する①層はそれを覆う形で堆積している。第 2 面で検出した L字を呈す区画溝 SDO2と②層の落ちこむ周辺を境に、土地区画あるいは土地利用が異なっていたと考えることができる。①層が②層を覆う形で西側に続くのは、それまであった土地区画を整地し、西側に延伸しているものと捉えることも可能であろう。

当該地周辺は、茨木城城下町として成立し、茨木城廃城後も近世在郷町として発展してきた 地域である。したがって、中世末以降は、自然堆積層の上面に生活が営まれるというより、建 物の建替えや土地利用の変化に伴い整地等をおこない生活が営まれている状況が多くみられ る。言い換えれば、茨木遺跡各調査区における江戸期の土地利用、改変回数によって面が異な り、茨木遺跡の中で共通した遺構面把握が困難な状況でもある。

しかしながら、明治期の地籍図をみてみると、現在の道路や水路と一致する点が多く認められ、今次調査区で検出した柵列や区画を意識した溝で得られたような空間や建物軸等の情報を検討していくことで、各調査区の時期的な把握や変遷が明らかになっていくものと考えられる。 (大向・藤田)

茨木遺跡(IK13-6)

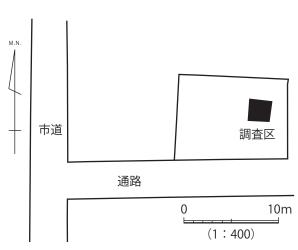
所在地 茨木市別院町 1437番 1 、1437番 3 調査期間 平成 25年 12月 2日 調査担当 高村 勇士

調査に至る経過

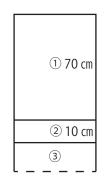
茨木遺跡内で個人住宅建設が計画されたため、平成25年12月2日に申請地内において2m×2mの調査区を設定し、確認調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、本発掘調査をおこなった。

基本層序

断面柱状図①は層厚約70cmの盛土。②は層厚約10cmの整地土層である5YR3/6暗赤褐色細粒砂混じりの2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂。③は地山層であり7.5Y6/1灰色粘質シルトである。なお、③上部(南壁断面第3層)は、鉄分の沈着により変色している。今次調査では、②までを機械掘削し、③上面で遺構を検出し調査をおこなった。ただし、一部機械掘削時に掘りす



第22図 茨木遺跡(IK13-6)調査区配置図



第23図 茨木遺跡(IK13-6)断面柱状図



第24図 茨木遺跡(IK13-6)調査地位置図

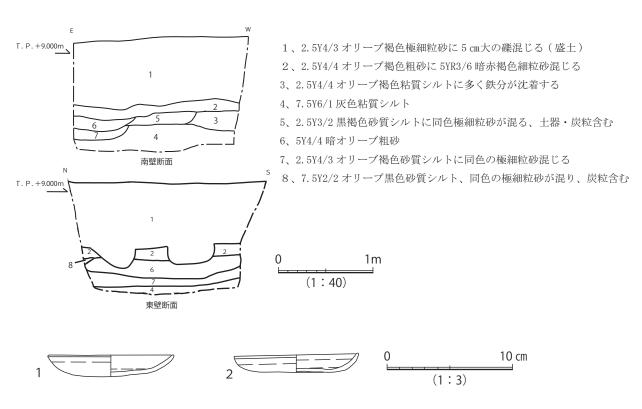
ぎてしまった。遺構・遺物 今次調査では、調査区東側に南北溝 (SD1) 一条を検出した。SD1 は南北に延伸しており、東側の肩部も調査区外にあるため、その規模は不明である。南壁断面を見ると、5・6・7層が SD1の埋土であり、その堆積の状況から、埋没した後に掘り直しされたことが推測できる。SD1が最初に作られた時期や掘り直しの時期を考えることができる遺物はないが、5層からは、後述する近世の所産と考えられる土師器皿が出土しており、SD1の最終埋没は近世以降と考えられる。

先述したように 5層からは、土師器皿 1、2や炮烙の口縁部、瓦器の細片が出土しており、 今次調査の出土遺物の大半はこの層から出土している。

遺物 1 は、口径約 10cm器高約 1.7cmを測り、体部外面に指頭圧痕が見られる。遺物 2 も口径約 10cm約 1.5cmを測り、体部外面に指頭圧痕も見られ、わずかながら底部内面がへそ状に盛り上がる。いずれも詳細な時期を特定するのは困難であるが、近世の範疇で捉えられる。

まとめ

今次調査において検出された SD1も、掘り直し後の層から近世の所産と考えられる土師器皿などが出土していることから、当該地の近世在郷町の様相を示していると考えられる。今次調査直前に約50m北東でおこなわれた共同住宅建設に伴う調査 (IK13-3)において、流路が埋没した後、一面に10cm大の扁平な礫を敷いた大規模な土木工事がおこなわれたことが判明している。今次調査において見られた SD1と標高もほぼ一致することから、その関連性を窺うことができ、今後の検討の材料となる。また、当該地域の近世在郷町を検討する際、天保14年(1843)の茨木村絵図(茨木神社所蔵)により、近世末には現在地に存在することが確認できる唯教寺の存在も、北に延伸するSD1との関連を含めて考慮する必要がある。(高村)



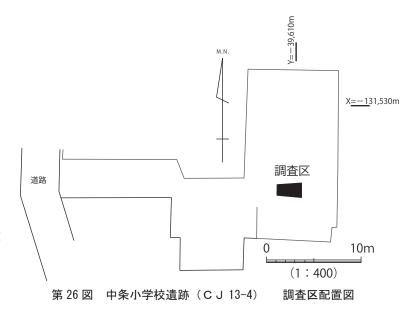
第 25 図 茨木遺跡 (IK 13-6)調査区断面図・出土遺物実測図

中条小学校遺跡(CJ13-4)

調査地 茨木市下中条町 23番 2、24番 7の一部、25番 2 調査期間 平成 25年 9 月 17日 調査担当 大向 智子

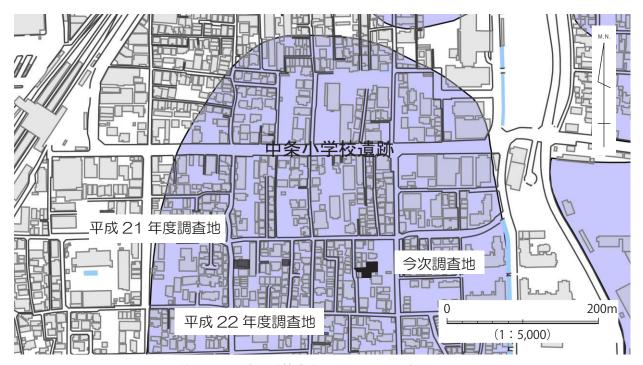
調査に至る経過

本調査は、茨木市下中条町で計画された個人住宅建設に伴う発掘調査である。申請建物範囲には、既に新築建物の基礎が敷設されていたため、同敷地内の3.4㎡の範囲を掘削した。



基本層序

南壁面では、盛土(層厚約 40cm)直下から①作土:N4/0灰色極細粒砂まじり粘質シルト(約 10cm)②床土:2.5Y6/1黄灰色極細粒砂まじり粘質シルト(約 5 cm)③2.5Y5/1黄灰色極細粒砂まじり粘質シルト(約 5 cm)④包含層:10YR5/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒・土師質土器片含む(約 5 cm)⑤遺構面:2.5Y6/2灰黄色粘質シルトまじり細粒砂(約 25cm)⑥7.5Y6/1灰色粘質シルトにマンガン含む(全体的に酸化)(約 15cm)⑦地山:7.5Y6/1灰色礫・細粒砂まじり粘質シルト(全体的に酸化)の堆積を確認した。遺構検出面は⑤層上面で、T.P.+10.000mである。図2 調査地位置図(S=1/5000)遺構・遺物 約 2.5m× 1.5m幅の調査区の南西隅で SK01を検出した。調査区に切られた状態で検出したため、全体の様相は判然と



第27図 中条小学校遺跡 (CJ13-4)調査地位置図

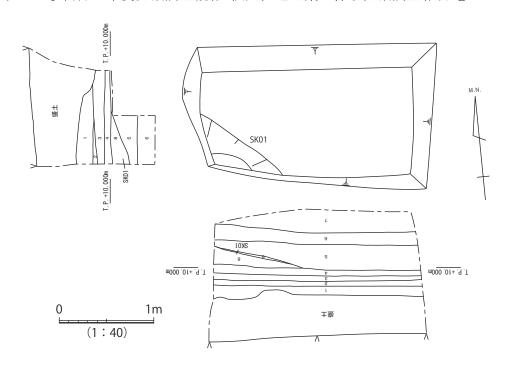
しないが、直径 70cm以上× 50cm以上、深さ約 20cmである。埋土として⑧ 10YR4/1褐灰色極 細粒砂まじり粘質シルトに炭粒含む、が堆積し、東側掘方部分には⑤のベース土が崩れて土 壌化した⑨ 10YR5/1褐灰色細粒砂が堆積する。出土遺物として弥生土器片や須恵器片が挙げら れる。全て細片で実測に耐えうるものはないが、弥生土器の体部片にはタタキが残るものがある。

まとめ

当該地は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である中条小学校遺跡包蔵地内に位置する。付近一帯の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構面の広がりがみられる。周辺の調査事例をみてみると、当該地の北側及び西側へ約200m離れた位置での遺構検出面が T. P. +11. 2~10.8mであるのに対し、当該地での遺構検出面は T. P. +10.0mである。周辺の地形は北西から南東へ向けての緩傾斜がみられるが、200m程度の距離でこの差がうまれていることから当該地周辺には窪地があったことが想定できる。今回検出した遺構は、細粒砂の上からの切り込みであり、付近一帯でみられるベース土とは様相が異なる面での検出となった。当該地は東側に元茨木川が流れているため、その支流があった可能性も考えられる。今回の調査によって、弥生時代後期頃の地形を考えるうえでも貴重な資料を得ることができた。

〈参考文献〉

茨木市教育委員会 2010『平成 21年度発掘調査概報-個人住宅建築に伴う発掘調査報告-』茨木 市教育委員会 2011『平成 22年度発掘調査概報-個人住宅建築に伴う発掘調査報告-』



- 1 N4/0灰色極細粒砂まじり粘質シルト (作士) 5 2.5Y6/2灰黄色粘質シルトまじり細粒砂 (ベース士)
- 2 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂まじり粘質シルト (床虫) 7.5Y6/1 灰色粘質シルトにマンガン含む (全体的に酸化)
- 3 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂まじり粘質シルト 7 7.5Y6/1灰色細粒砂まじり粘質シルト(全体的に酸化) (地山)
- 4 10YR5/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに 8 10YR4/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒・土師質土器片含む 炭粒・土師質土器片含む (包含層)
 - 9 10YR5/1褐灰色細粒砂に土師質土器片含む

第28図 中条小学校遺跡 (CJ13-4)調査区平面・断面図

中条小学校遺跡 (CJ 13-7)

所在地 茨木市奈良町 590番 2、591番 2 調査日時 平成 25年 12月 11日~ 12日 調査担当者 高村勇士

調査に至る経過

今回、中条小学校遺跡内で個人住宅建設の 計画があり、平成25年12月11日に確認調査



① 60 cm

2 10 cm

3 20 cm

をおこなったところ、遺構・遺物を検出した第29図 中条小学校遺跡 (CJ 13-7) 調査区配置図 ので、本発掘調査を同日から平成25年12月

12日まで2日間おこなった。

中条小学校遺跡は、昭和51年度に中条小学校改築に伴って発見された遺跡で、その南端は東奈良遺跡と重複している。今回の調査区は南端付近に位置しており、東奈良遺跡に近接した場所にあたる。

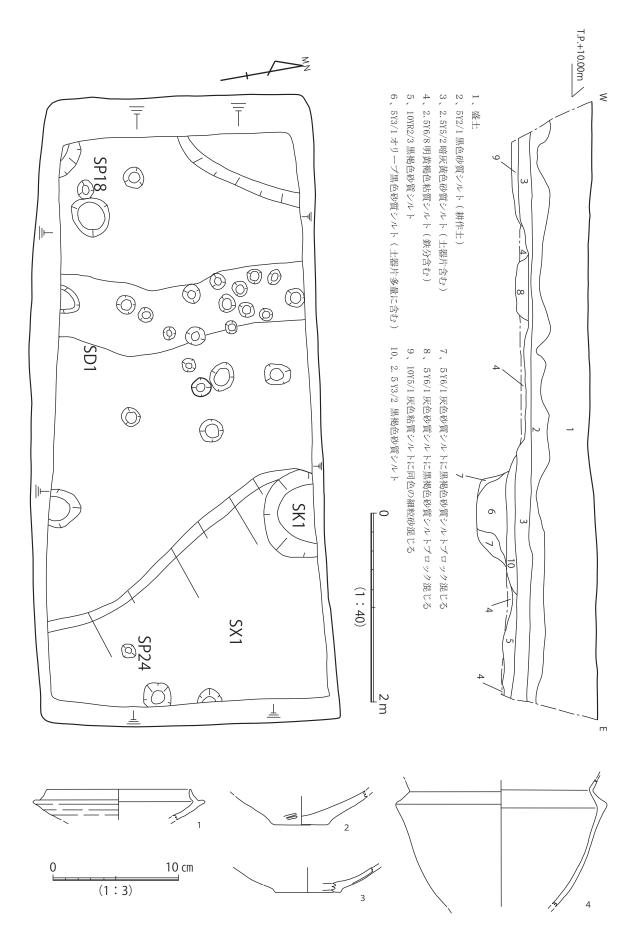
基本層序

調査区の現地表面の標高は T.P. + 10.2mである。基本層序は、

①層から④層に大別できる。①層は盛土。②層は 5Y2/1黒色砂質 第 30 図 中 条 小 学 校 遺 跡 シルトの耕作土。③層は 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトの遺物包含 (CJ 13-7) 断面柱状図



第31図 中条小学校遺跡 (CJ 13-7) 調査地位置図



第32図 中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区平面·断面図·出土遺物実測図

層で、直下の④層上面が凹凸するのに対し③層上面はほぼ水平となっていることから、上面は耕作にともなって整地されていると考えられる。④層は鉄分を多く含む 2.5 Y6/8明黄褐色粘質シルトの地山層である。遺構は④層上面で検出した。なお、④層上面は T.P.+9.5 m(GL-0.7 m)を測る。

遺構・遺物

SK1は、本調査区の中では比較的多くの遺物を含む土坑である。その半分が調査区の外にあり全容は確認できなかったが、検出した部分から推定するに直径約1mを超える円形であると考えられる。SK1の時期について、出土遺物の大半は弥生土器であり(2・4)、弥生時代と考えることができるが、詳細な時期の特定には至らない。また、わずかに古代の所産と考えられる須恵器も出土しているが、その遺構断面観察から、後世の流入と考えて支障はない。また、後述のSX1を切っていることも遺構断面の観察により確認できる。

柱穴状遺構は、SP18・SP25とそれ以外に大別でき、本調査区の遺構検出面には少なくとも 2 時期の遺構群が存在していると考えられる。

SP18・SP25の埋土は、黒褐色砂質シルトで、検出面から SP18が 11.3cm、SP25が 19.7cmと 他の柱穴状遺構と比して深い。

上記以外の柱穴状遺構の多くはごく浅く、上部の大半を削平されたものと考えられる。ただし、SP18、SP25以外の柱穴状遺構の埋土は、暗灰黄色砂質シルトで一様であり、同一の状況で埋没したものと推測できる。それらの埋土には、弥生土器や、須恵器・土師器の細片などが確認できたが、いずれも細片であり詳細は不明なところが多い。

SD1の上から切っている柱穴状遺構の一部は、SD1の埋土の濃淡を検出してしまった可能性がある。

しかし、SD1の上面以外にも同様の柱穴状遺構は存在し、それらと関係する可能性もあるため、柱穴状遺構として記録した。

また、③の遺物包含層まで機械掘削を行ったが、その中から1・3が出土した。1は復元口径約11.5cmを測る古墳時代後期の須恵器の杯身である。3は13世紀頃の所産と考えられる樟葉型瓦器椀である。調査区東側に広がる遺構(SX1)を検出した。北、南、東端は調査区外に延びており、全容は確認できず、その性格は不明であるが、弥生土器片や須恵器片などが出土した。

まとめ

今次調査区のおよそ100m西側では、平成14年度・平成15年度・平成18年度と共同住宅建設に伴い発掘調査が実施されており、弥生後期後半から古墳時代前期初頭の円形周溝墓や、奈良時代から平安時代の柱列や建物跡が検出されているが、今回の調査では、それらに直接関わる遺構は検出できなかった。ただし、SK1が弥生時代に該当することから、既往の調査区と同時期に存在した可能性も考えられる。 また、西側の平成18年度の調査区の遺構面は、北側がT.P.+10.6m、南東端でT.P.+10.2mであった。今次調査区の遺構面は、T.P.+9.5m前後であり西側の調査区よりも約0.7m低い。これまでの調査でも遺構面が北西ー南東方向に傾斜して下っていることが確認されているが、今回の調査により、さらに東に遺構面が下っていることが確認できた。(高村)

参考文献

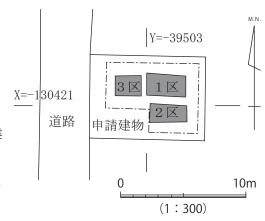
茨木市教育委員会 2003『平成 14年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2004『平成 15年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2007『平成 18年度発掘調査概報』

倍賀遺跡(HK13-2)

所在地 茨木市春日四丁目 228番 3 調査期間 平成 25年 11月 18・19日 調査担当 木村 健明

調査に至る経過

大阪府茨木市春日四丁目で計画された個人住宅建設に伴い、約12.8㎡の調査を実施した。調査は掘削土置き場の都合上3箇所(1~3区)に分けておこなった。以下、調査成果の概要を報告する。



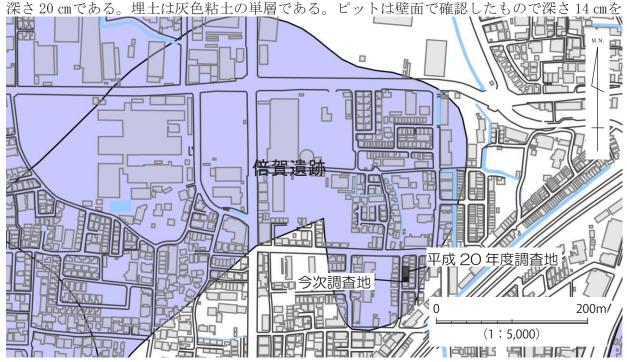
第33図 倍賀遺跡(HK13-2)調査区配置図

基本層序

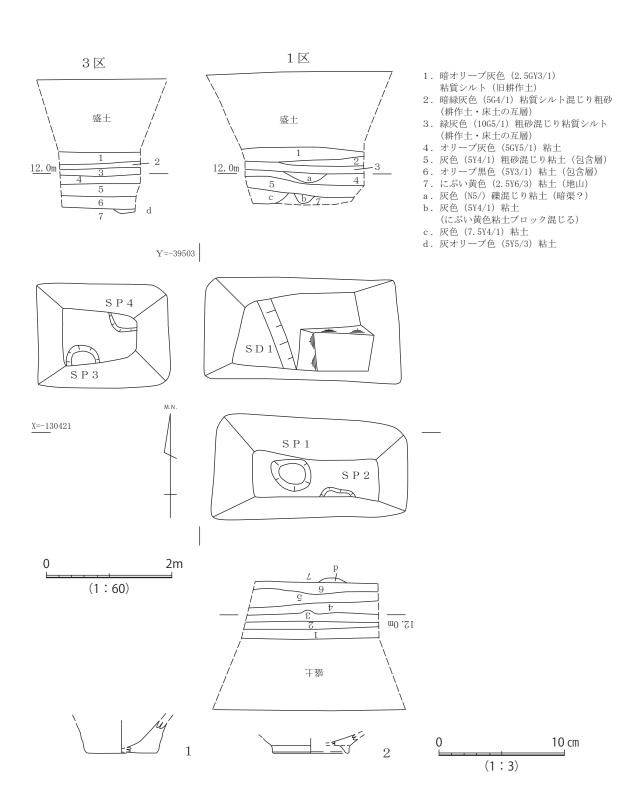
現地表面の標高は13.5m前後を測る。各区とも層序はほぼ同じである。盛土(厚さ1.1m)の下に暗オリーブ灰色粘質シルト層(旧耕作土・厚さ15cm)、暗緑灰色粘質シルト混じり粗砂・緑灰色粗砂混じり粘質シルト層(各厚さ15cm・耕作土と床土の互層)、オリーブ灰色粘土(厚さ20cm)、灰色粗砂混じり粘土・オリーブ黒色粘土(各厚さ20cm・包含層)があり、地山であるにぶい黄色粘土となる。

遺構

1区で溝1条 (SD1)、ピット1基、2区でピット2基 (SP1・2)、3区でピット2基 (SP3・4)を検出した。SD1は、1区の西側で検出した。長さ1.0 m以上・幅1.0 m以上・



第34図 倍賀遺跡(HK13-2)調査地位置図



第35図 倍賀遺跡(HK13-2)調査区平面·断面図·出土遺物実測図

測る。埋土は、灰色粘土の単層である。

SP1・2は2区で検出した。SP1は、長径 60 cm・短径 50 cm・深さ 12 cmである。埋土は灰オリーブ色粘質シルトの単層である。SP2は長径 50 cm以上、短径 25 cm以上、深さ8 cmである。埋土は灰オリーブ色粘土の単層である。SP3 は長径 50 cm・短径 30 cm以上・深さ28 cmである。埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。SP4 は長径 50 cm以上・短径 25 cm以上・深さ8 cmである。埋土は灰オリーブ色粘土の単層である。いずれも遺物は出土していない。

遺物

遺物は包含層中から土師質焼成の土器・瓦器などが数点出土したのみである。

その内、図化可能な遺物は2点である。1は平底の底部である。3区西壁第5層から出土した。 弥生土器の可能性がある。磨滅が著しく調整は不明である。2は土師器椀の底部である。2区 の包含層出土である。断面三角形状の貼付高台をもつ。

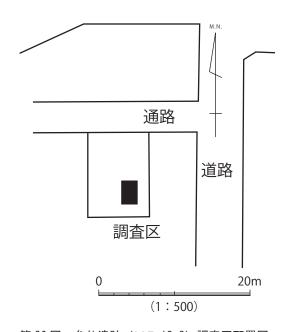
まとめ

今回の調査では、溝やピットを検出した。遺構中から遺物が出土していないため、時期は不明である。平成20年度におこなわれた北側隣接地の調査においても同様の様相を示しているようであり、溝状遺構の一部を検出している。遺構検出面がGL-2.0m前後と深いため、周辺にも良好に遺物包含層・遺構が分布していると考えられ、調査成果を蓄積することで、周辺の様相が明らかになっていくと思われる。(木村)

参考文献

茨木市教育委員会 2009『平成 20年度発掘調査概報 -個人住宅建築に伴う発掘調査報告 -』

牟礼遺跡(MR 13-8)



所在地 茨木市園田町 749番地 24·749番地 25

調査期間 平成 25年 11月 14日

調査担当 高村 勇士

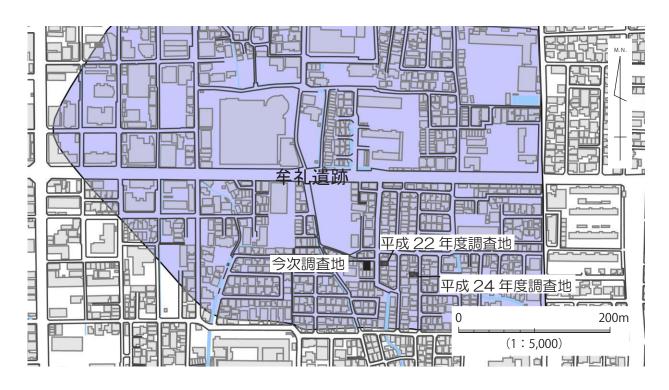
調査に至る経過

牟礼遺跡内で個人住宅の建設が計画され、平成25年11月14日に建設予定地内で2m×3mの調査区を設定し確認調査をおこなった。調査区の範囲内では、遺構は検出されなかったが、良好な包含層が確認できた。

基本層序

今次調査区の土層は6層に大別できる。①層は盛 土。②層は耕作土。③層は暗緑灰色粘質シルト層。

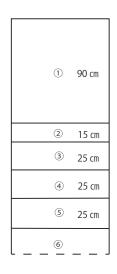
第36図 牟礼遺跡 (MR 13-8) 調査区配置図 土。②層は耕作土。③層は暗緑灰色粘質シルト層。 ④層は暗オリーブ灰色極細粒砂まじりの粘質シルト層。⑤層は黒褐色砂質シルトの遺物包含層。 ⑥層は黄灰色極細粒砂層である。GL - 130cm付近で検出した④層は、均質で安定しており、ベース面を構成しうる均質で安定した基盤層ではあったが、平面精査をしても、今次調査区では遺構・遺物は確認できなかった。GL - 155cm付近の⑤層において、層厚 25センチの土壌化した遺物包含層を検出し、下で触れる遺物が出土している。



第37図 牟礼遺跡 (MR 13-8) 調査地位置図

遺構•遺物

今回の調査は、その面積が狭小であったこともあり、遺物包含層直下の層およびその他の層においても遺構は認められなかった。出土遺物としては、須恵器杯蓋や土師器椀、瓦器椀などが認められた。1 は須恵器杯蓋であり、復元口径 17.4cm、残存高 1.7cmを測り、7世紀から 8世紀の所産と考えられる。2の土師器椀は 9世紀から 10世紀の範疇で捉えられ、復元口径 13.2cm、器高 3.5cmを測る。内面にみがきは見られず、外面には口縁端部に横なでが見られ、体部には指頭圧痕が確認できる。3 は瓦器椀の口縁部であり、暗文などから和泉型のⅢ期からⅣ期前半のものと考えられ、13世紀から 14世紀の年代観が与えられる。



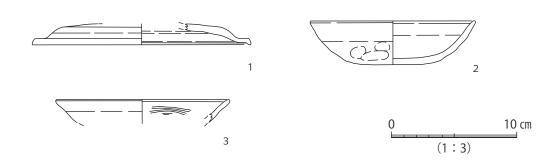
第 38 図 牟 礼 遺 跡 (M R 13-8) 断面柱状図

まとめ

牟礼遺跡は、中津町・中村町・末広町・園田町に広がる安威川右岸の沖積地をその範囲としているが、その南部ではこれまで平成22年度の調査地において遺物包含層を検出しているのみであった。今回の調査地においても、層厚25cmの良好な遺物包含層と遺物が確認できた。また、古代の杯蓋や13世紀から14世紀の瓦器椀などが出土し、今回の調査において出土した遺物も平成22年度の調査地と同様に、時代に大きな幅を持っている。牟礼遺跡の南部では未だ遺構が検出されておらず、不明な点は多いが、今後の調査においては注意を喚起できる知見が得られた。(高村)

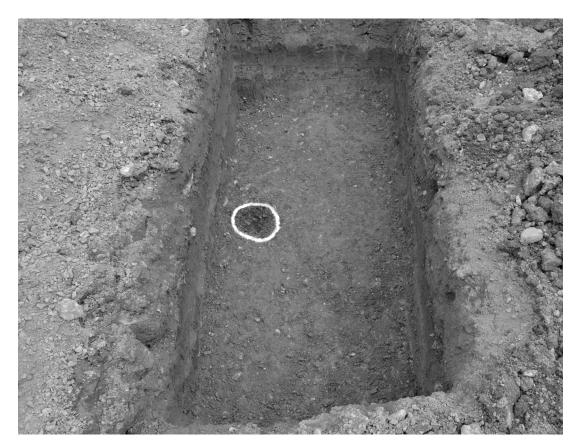
参考文献

茨木市教育委員会 2011『平成 22年度発掘調査概報』

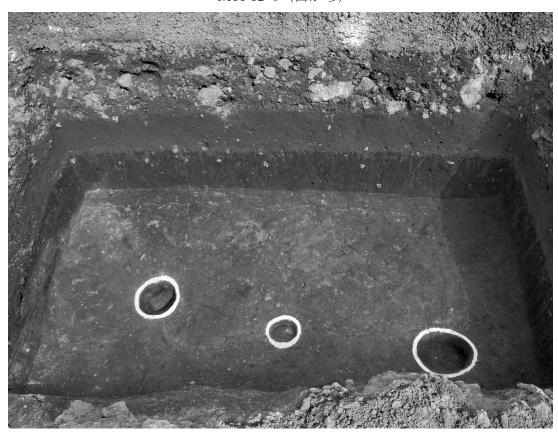


第39図 牟礼遺跡 (MR13-8) 出土遺物実測図

写真 図版



MH 12-3 (西から)



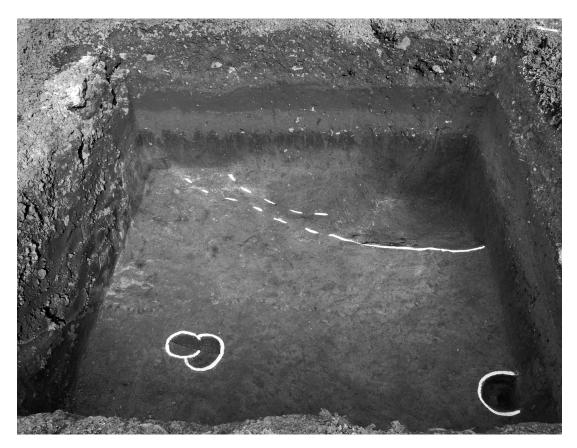
MH 13-1 (西から)



MH 13-3 (西から)



MH 12-4 (西から)



MH 13-5 (西から)



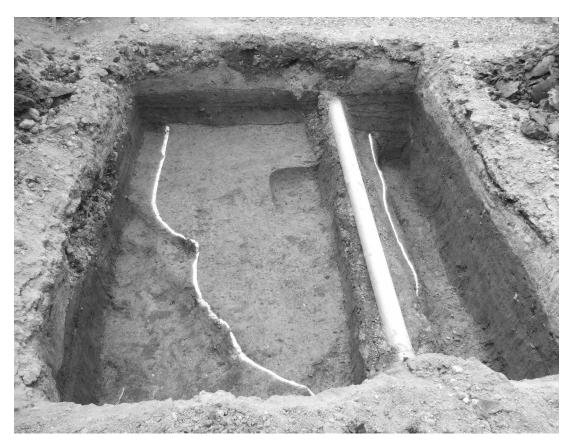
耳原遺跡 各調査区遠景



MH 13-2 全景(北西から)



KS 13-3 (東から)



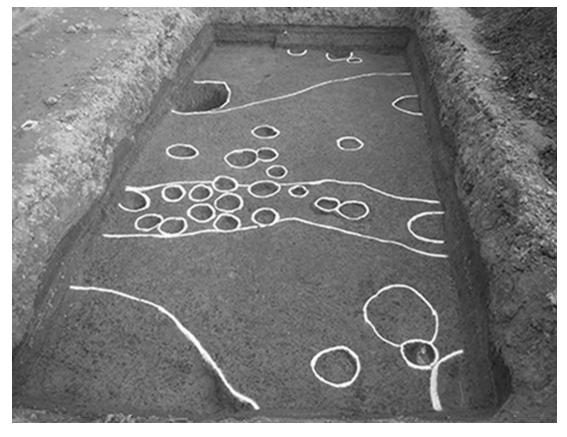
KS 13-4 全景 (北西から)



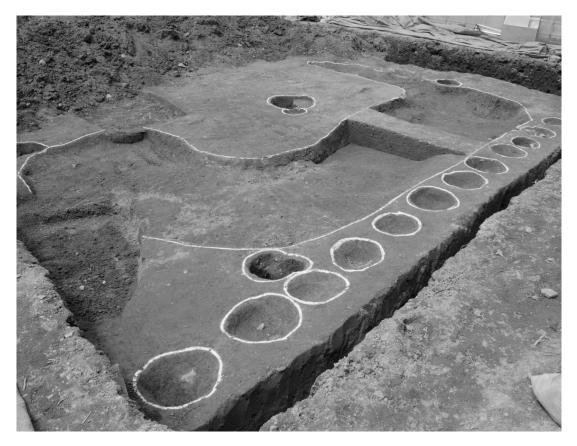
KS 13-5 (西から)



C J 13-4 全景 (北東から)



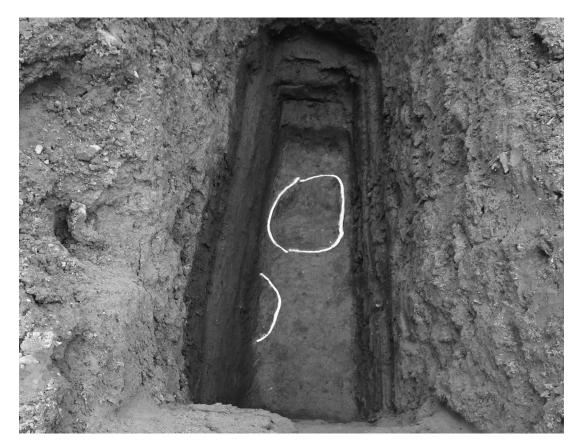
C J 13-7 (西から)



IK13-1 第1面全景(北東から)



IK 13-6 南壁断面(北から)



HK 13-2 2区 (東から)



MR 13-8 北壁断面 (南から)

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうごねんどいばらきしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほうろく(こっこほじょじぎょうにともなうはっくつちょうさ									
書名	平成25年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報6 (-国庫補助事業に伴う発掘調査-)									
シリーズ名	茨木市文化財資料集									
シリーズ番号	第59集									
編著者	藤田徹也(編)大向智子 木村健明 高村勇士 中東正之									
編集機関	茨木市教育委員会									
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号									
発行年月日	平成26年(2014年)3月31日									
所収遺跡	所在地	北緯		東経	調査期間	調査面積		調査原因		
耳原遺跡	耳原一丁目281-7, 8, 9, 10	,11 34° 83′	65 "	135° 56′ 38″	平成25年4月8日 ~9月5日	1	8m²	個人住宅建設工事		
耳原遺跡	耳原一丁目276-	-5 34° 83′	67″	135° 56′ 48″	平成25年7月24日 ~7月25日	16	5. 5 m²	個人住宅建設工事		
春日遺跡	春日一丁目84-	5 34° 81′	90″	135° 56′ 24″	平成25年8月5日 ~8月7日	31. 5 m²		個人住宅建設工事		
春日遺跡	春日五丁目77-1	5 34° 82′	38"	135° 56′ 24″	平成25年9月24日 ~9月25日	15. 2 m²		個人住宅建設工事		
春日遺跡	春日五丁目204-2	29 34° 82′ 3	29"	135° 56′ 20″	平成25年10月30日	7. 5 m²		個人住宅建設工事		
茨木遺跡	大手町1653-3, 1653	34° 81′	65 "	135° 57′ 11″	平成25年6月27日 ~7月3日	36 m²		個人住宅建設工事		
茨木遺跡	別院町1437-1, 1437-3の各-	一部 34° 84′	79″	135° 57′ 45″	平成25年12月2日	4 m²		個人住宅建設工事		
中条小学校遺跡	西中条町140-7, 140-13の-	-部 34° 81′	15"	135° 56′ 39″	平成25年8月27日	11	. 2 m²	個人住宅建設工事		
中条小学校遺跡	奈良町 5 90-2, 591-2の-	-部 34° 80′ 8	85″	135° 56′ 54″	平成25年12月11 日~12月12日	18 m²		個人住宅建設工事		
倍賀遺跡	春日四丁目228-	·3 34° 82′	36"	135° 56′ 81″	平成25年11月18 日~11月19日	8 m²		個人住宅建設工事		
牟礼遺跡	園田町749-24, 749-	-25 34° 81′ 3	36"	135° 58′ 17″	平成25年11月14日	$6\mathrm{m}^2$		個人住宅建設工事		
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事		持記事項		
耳原遺跡	集落跡	弥生前期		柱穴・土坑	弥生土器・瓦	弥生土器・瓦器				
耳原遺跡	集落跡	弥生前期		柱穴·土坑	土師質土器					
春日遺跡	集落跡	古墳時代		溝						
春日遺跡	集落跡	古墳時代		溝	須恵器・土師質土器					
春日遺跡	集落跡	古墳時代		溝	土師器・須恵器・瓦					
茨木遺跡	集落跡	古墳時代	柱穴	・井戸・溝・土坑	陶磁器・銭貨・瓦・泥面子					
茨木遺跡	集落跡	古墳時代	溝		土師器					
中条小学校遺跡	集落跡	弥生・古墳時代		土坑 弥生土器・須恵		恵器	:			
中条小学校遺跡	集落跡	弥生・古墳時代	柱	穴・溝・土坑	土師器・須恵器					
倍賀遺跡		古墳時代		溝・柱穴	主穴 土師質土器・瓦器					
牟礼遺跡	集落跡	縄文晩期			土師器・須恵器・〕	瓦器碗	遺構は	確認されず。		

平成 25 年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 6

- 国庫補助事業に伴う発掘調査 -

発行日平成26年3月31日発行茨木市教育委員会印刷所株式会社トゥユー